

## 伊庭想太郎編(7)

## 公盗の巨魁

## 強引な政治力、金権体質も

## 逆境にめげず立身出世

明治の政界にあって、星亨は、貧しい江戸庶民の出身から初めて高位に上りつめたという意味で、特筆すべき人物である。嘉永3年(1850)4月、江戸八官町(現、銀座)生まれ。伊庭想太郎より一歳上になる。

幼いころ左官職人の父が出奔し、苦勞を重ねた母は漢方医で易者でもあった星泰順と再婚した。つらい境遇にありながら、知識欲の盛んな少年は自らの才覚によって、新しい運命を切り開いた。

前島密の家塾や開成所で学び、当時兵庫県知事だった陸奥宗光に才能を見出され、官途に就く。出世の道を駆け上って、若くして横浜税関長に。官費でイギリスに留学、弁護士資格も得た。

政界に乗り出したのは明治15年(1882)である。板垣退助率いる自由党に入党、衆院議員になる。その強引な政治力は際立っていた。たちまち頭角をあらわし、衆院議長、駐米公使も務めた。

権力の階段を上るにつれ、金権体質もあらわになった。軍備拡張のために政府が増税(地租増徴)を提案した際、民権派は猛反発したが、現実主義者の星は賛成論に傾き、政府との提携を画策した。反対派を切り

崩す買収工作を自ら行ったといわれる。

野党から一転、与党の政友会総務となり、第4次伊藤内閣では通信相に任命された。一方で、東京市会議員選挙に出て当選した。当時は衆院議員との兼務が可能だった。やがて市議会で多数を占める「星派」を握り、市参事会員、市教育会会長に就任した。

## 「毎日」が連日の筆誅

当時、都市整備を急いでいた東京市は鉄道、水道、電気など大規模な公共事業を進めていた。そ



星亨と自署＝花井卓蔵著『訟庭論草』所収

の膨大な利権に星派の議員たちが群がり、ついに疑獄事件が浮上した。

かくて権勢をほしいままにする星を、新聞各紙が攻撃することになる。その先陣を切って痛烈な筆誅を加えたのが、改進黨系の「毎日新聞」だった。明治3年、わが国初の日刊紙として発刊された横浜毎日新聞の後身である。よく誤解されるが、同5年発刊の東京日日を母体とする現在の毎日新聞ではない。

「帝都の大汚辱！ 腐敗せる東京市会！ 醜魁は星亨！」「通信大臣星亨は東京市に於ける公盗の巨魁なり。彼の罪悪は既に公然の秘密なり」

明治33年(1900)10月から11月にかけて、毎日新聞は連日のように、星を指弾する記事を掲載した。同紙の主筆は島田三郎だった。若いころ沼津兵学校で学んだことは先述した。想太郎との関係は、後の公判でも注目されることになる。

非業の死を遂げた星は、政治にカネの力を駆使して、しかし私腹を肥やすことはなかったのだろう、遺産は少なかったといわれる。

## 島田三郎(1852-1923)

幕臣の子。昌平黌、沼津兵学校、大学南校で学ぶ。「毎日新聞」(横浜毎日新聞の後身)主筆。改進黨の創設に参加。神奈川県議会議長。衆院議員。

